

# 学校図書館の役割を踏まえた授業等への 関わり方

---

## 【基調報告】

### 教師へのサービスから広がる授業連携

木下通子（埼玉県立浦和第一女子高等学校担当部長  
兼主任司書）

---

## はじめに

新学習指導要領では、生徒の主體的・対話的で深い学びの実現に向けた授業に学校図書館を活用することとされていますが、いくら司書が授業と連携したいと思っても、教師が学校図書館を活用したいと思わなければ、実現できません。

私は昨年、現任校である埼玉県立浦和第一女子高等学校（浦和一女）に転勤しました。浦和一女は、創立120年になる女子伝統校で、ほとんどの生徒が国公立大学に進学する超進学校です。図書館の蔵書は55,000冊。開架書架には44,000冊が出ています。そのうち10,000冊が洋書で、英語科では1年生から「多読プログラムに」力を入れています。多読の本を借りるという目的もあるため、図書館の貸出は年間一人平均約24冊と、とても多いのですが、受験指導が中心の授業体系で、図書館を活用する授業はほとんど行われていませんでした。そこで、まず、先生方に図書館の機能を知ってもらうための努力をしました。

## 広報に力を入れる

学校司書になって35年。どの学校に行っても、力を入れているのが新着案内の発行です。浦和一女は、PTAからの助成もあり予算が潤沢で、年間2000冊ほど新刊本を購入し、生徒や教師からのリクエストも随時受け付けています。そこで、受け入れた本を全部お知らせする。生徒が必要な情報を提供することを目標に、二週間に一回程度、新着案内を発行しています。新着案内の表面には、図書館や図書委員会からのお知らせと書評を、裏面にはその週に受け入れた本のリストを掲載しています。

私は司書は自分の読んだ本を、言葉や文章で利用者に還元できることが大きな専門性だと思っているので、読

みやすい書評になるように心がけて書評を書いています。定期的に新着案内を発行するようになってから、「新しい本がたくさん入るんですね」と先生方から声をかけられることが増えました。まさに「知らせないと伝わらない」ということを体感しました。

## 本のお届けサービス

新着案内を配ったときに、この本、おもしろそう！と声をかけられたら、本を先生にお届けするサービスをしています。来ていただくよりお届けすることで、他の先生にも本に興味を持ってもらうきっかけが作れます。埼玉県の高校の中では、職員室に先生向けの本コーナーを作って、自由に手にとってもらっているところもありますが、うちの学校は職員室がなく、先生方は研究室に別れて暮らしているので、お届けしたときに他の先生ともお話するチャンスです。

そのときに、本の話をしたり、リクエストをされたりすることもあり、教材研究の話や授業の内容に話が広がっていきます。

## レファレンスインタビュー

若い先生の中には、図書館に教材を探しに来て授業の組み立てを考える先生もいます。先日も、社会科の先生が日本史の南北朝の対立から室町時代初期に関してわかりやすく説明できる資料はないかと図書館に来られました。ベテランの先生はいままで経験でいろいろなエピソードもご存じですが、若い先生は授業を膨らませるための資料を探しにやってきます。こういう時には先生がどんな資料を求めているのか、授業で話すことを教えてもらいます。授業の中でどんな資料が必要か、どこを切り口に話をしたいのか、はっきりしないので図書館に来られても、司書とやりとりするうちに、必要なものははっきりしてきます。この時は本校の資料でびったりくるものがなかったのですが、市立図書館の児童コーナーに関連図書があり、相互貸借で借りてきて提供しました。教師への資料提供は、すぐには調べ学習や生徒が図書館資料を使った授業連携にはつながりませんが、資料のことは図書館へという意識を持ってもらうきっかけとしてと

でも重要です。一人一人の先生への資料提供を大切にしています。

### 図書館オリエンテーションと授業

私が転勤する前から、本校では国語科とコラボレーションした新書レポート、体育科とコラボレーションした環境問題の調べ学習が行われていました。が、図書館は先生から頼まれた資料を提供するという形で、司書が授業に積極的に関わることはしていませんでした。

1年目になる昨年は、いままでどんな形で授業を進めていたのか、担当の先生と打ち合わせをしながら図書館がどこでどんな関わりができるかを考えて行きました。

本校では図書館オリエンテーションは入学直後に行われます。さいたま市内から入学してくる生徒は、司書のいる小・中学校図書館を経験して進学してくるので、図書館を使い慣れています。すべての生徒がそういうわけではありません。

貸出が毎日100冊以上ある学校なので、オリエンテーションではセルフ貸出の方法を伝えていたようでした。私は貸出の方法よりも、図書館はなんのためにあるのか、みなさんはどんなサービスを受けられるのかを知ってもらいたいと思い、オリエンテーションでなにがどこにあるか、NDCの説明を含めて館内の案内をし、予約制度、利用者のプライバシーを守ることなど、「図書館の自由」について話をしています。

オリエンテーションはきっかけづくりの場なので、深く説明することができません。そこで、授業が入る場合、繰り返し、NDCについて説明し、本の検索の仕方をご紹介します。

### 国語科「新書レポート」

何年かにわたって本校図書館が連携しているのが、「新書」を読ませる新書レポート。生徒は学期に一回ペースで、図書館に新書を借りに来て選び、国語科が作成したワークシートに内容の要約や感想を記入します。そこで、国語科の先生にお願いし、一年目は新書選びのオリエンテーションをさせていただくことにしました。

本校には約7000冊の新書があり、岩波新書、岩波ジュニア新書、ちくまプリマー新書は定期購入しています。

私も最初は手探りの状況だったので、NDC新書もNDC順に並んでいること、どれを読んだらいいかわからなかったら、気楽に聞いてくださいと話しました。それでも、やはり何を読んだらいいのかわからない、新書が選べないという生徒が多く、二年目の今年、国語科とコラボレーションして取り組んだのが、新書の「点検

読書」です。

### 「点検読書」

「点検読書」については、「授業に役立つ学校図書館データベース」(東京学芸大学 学校図書館運営専門委員会)に、新潟の押木和子氏(国語科教諭)と、東京の千田つばさ氏(都立小川高校司書:当時)の実践があり、それを参考にしました。また、岩波ジュニア新書「ホンキのキホン」に「新書回転ずし」の実践を書いている清学園の片岡紀夫氏から、資料を提供していただきました。

点検読書のやり方は次の通りです。

- ① 本を1テーブルごとにNDCにあわせて10冊用意し、表紙がみえるようにテーブルに並べる。
  - ② 1テーブル4人がけとする。
  - ③ 最初に奥付の見方や本のしくみ、新書とはなにかの説明を司書が行う。
  - ④ 説明が終わったら点検に入る。
  - ⑤ 好きな本を1冊とる。重なったらじゃんけん。
  - ⑥ 要約をするなら8~10分くらいで、要約なしで点検だけするなら5分でワークシートに記入。
- この時にタイマーを使って時間をしっかり図る。まえがきと、あとがきをしっかり読むように指示。
- ⑦ 司書は机間巡視して、なにがどこに書いてあるかわからない生徒をフォロー。
  - ⑧ 書き終わらなくても、時間で終了。本の評価(読みたいかどうか)は必ずしてもらう。
- 評価は主観でいいので、読みたい本はよみたくないとしていい→これが大事。
- ⑨ これを1つの作業として、本を変えてもう一回同じことをやる。
  - ⑩ もし、もっと時間が残ったら、最後の本を使って2分で本の紹介をしあう。この本を手にとった理由、なにが書いてあったか。
  - ⑪ 20分くらいしか時間がとれなかったら、説明 → 5分の点検 → もう一回5分の点検 → まとめ という形でもOK

2回同じことをやると生徒も達成感があります。

1年生9クラスで「点検読書」を行いました。テスト返却の時間をいただいたので、時間がないクラスは20分で2回。時間がたっぷりあったクラスは1コマ45分を全部図書館でいただいて、本の成り立ち、NDCのしくみ、奥付の見方などのところを丁寧に説明しました。

点検読書は、さまざまな新書と出会うためのきっかけづくりです。自分が読んだことのない、興味のない新書を

手に取ることで世界が広がります。生徒一人一人がこの新書を読みたいかどうかの本の評価をすることで、自分に興味がなかったり、少し読んでつまらなかった本をつまらないと言えることも大切です。

「点検読書」に取り組んだあとに、生徒に「新書選びに点検読書のワークは役に立ちましたか?」「レポートを書くのに役に立ちましたか?」という質問項目でアンケートをとったところ、7割の生徒が役に立ったと回答しました。生徒からは、「書名・出版社などを迷わず書けた」「本選びが簡単になった」「はじめに・あとがきの活用法を知ることができた」「どこから読んだらいいかわからなかったけれど、本の読み方がわかりやすくなった」などの感想が寄せられました・

また、先生方も効果を感じてくださったようで、新書レポートオリエンテーションで引き続きやっていこうということを確認しました。

教師へのサービス

図書館がいつも誰かに利用されていて、本の動きが出てくると、自分も図書館を活用してみようかと思う先生も出てきます。

雑誌やコミックを読みに息抜きに来る先生、新聞を読みに来る先生、お子さんのために絵本を借りに来る先生。教材だけでなく、ご自分の趣味やご家族のために資料を探しに来る先生もいます。先生方は日頃忙しく、書店に寄る時間ありません。もっと、本をみたいんだけど、時間がなくてという方がほとんどです。

生徒と違って、先生は人数が少なく、サービスをしやすい対象です。図書館は本を借りる場所という認識から、情報を得る場所、情報ステーションというように先生方の認識が変わっていくと、生徒にも活用させよう、授業でも使ってみよう意識が変わってきます。授業での利用を増やす第一歩は教師へのサービスを充実させることだと思っています。

「学校図書館ガイドライン」より

文部科学省 平成 28 年 12 月

・学校司書は、学校図書館を運営していくために必要な専門的・技術的職務に従事するとともに、学校図書館を活用した授業やその他の教育活動を司書教諭や教員とともに進めるよう努めることが望ましい。具体的には、1 児童生徒や教員に対する「間接的支援」に関する職務、2 児童生徒や教員に対する「直接的支援」に関する職務、3 教育目標を達成するための「教育指導への支援」に関する職務という 3 つの観点に分けられる。

・また、学校司書がその役割を果たすとともに、学校図書館の利活用が教育課程の展開に寄与するかたちで進むようにするためには、学校教職員の一員として、学校司書が職員会議や校内研修等に参加するなど、学校の教育活動全体の状況も把握した上で職務に当たることも有効である。

---

## 【報告】

### 「見える化」で学校図書館活用をもっとアクティブに提案する

山下知里（三重県立伊勢高等学校（学校司書））

---

## はじめに

「学校図書館はブラックボックス」—先輩司書からそう言われたことがある。学校図書館に何ができるのかわかりにくければ、できることをお店のメニュー表のように「見える化」して提案してはどうだろう…そんな気付きから、二校で展開してきた実践について報告する。

## 1. 宇治山田商業高等学校（2017～2018 年度）の実践

### （1）「山商図書館講座」

三年次に全員が取り組む課題研究では、生徒が 10 講座に分かれて一年間それぞれのテーマに取り組み、最後に後輩に向けてプレゼンテーションをするという流れができてきている。各講座が図書館を利用する時期も目的もさまざま（商品開発のための本格的なリサーチや著作権を学びたいというものから、ビジネス・アイデアのクリエイティブ・シンキングのために KJ 法をおこないたいというもの、ボランティア先に持参する手作り品やレクリエーションゲームの作り方を調べて実際に作りたいというものまで）あるが、司書が場当たり的に対応するよりも、伝えるべきことを「見える化」した方が質の高い支援になると考え、以下「山商図書館講座」（プレゼンテーションソフトを利用したスライド）を考案した。

- 「上手く！素早く！調べるための資料活用法」
- 「意外と誰も教えてくれない新聞の読み方」
- 「プレゼンテーション初歩の初歩を学ぶ」

上記については「教職員向け学校図書館利用の手引き」（2・（1）を参照）や教員向けイントラネット配信に添付したり、年度当初の商業科会議に提案したりとアピールした結果、2018 年度は 10 講座中 4 講座での利用があ

った。

また、当初は課題研究のために考案した形式を、他教科に応用して実施した講座もある。

- 「読書感想文の裏ワザ」(国語科)
- 「絵本の選び方&読み聞かせ方」(家庭科)

#### (2)「情報カードプリント」

「山商図書館講座」を実施した課題研究の生徒から、講座で説明したはずの内容を後になって(生徒が自分で調べたり作ったりをし始めてから)繰り返し質問されることがあった。当初はスライドのプリントアウトを配布資料にしていたが、生徒が授業後に取り組む時に必要なポイントを「見える化」すれば便利かもしれないと思いついた。

以下「情報カードプリント」はA3一枚を、半分はガイダンスの要点に割り、もう半分は生徒がリサーチのまとめ(引用、要約、参考文献)に利用できる欄にした。

また「山商図書館講座」を受講しない生徒も、図書館でのリサーチ・ペーパーとして自由に利用できるように、全種類をレターケースに入れて館内に常備した。

- 「Ver.1 本の情報活用」
- 「Ver.2 ネット情報の活用」
- 「Ver.3 思考と表現の情報活用」
- 「Ver.4 プレゼンで情報活用」
- 「Ver.5 新聞の情報活用」
- 「Ver.6 創作のための情報活用」
- 「Ver.7 英語で情報活用」
- 「Ver.8 絵本の読み聞かせ」
- 「Ver.9 読書感想文の裏ワザ」
- 「Ver.10 地域の情報を調べる」
- 「Ver.11 本のポップを作る」

## 2. 伊勢高等学校(2019年度~)の実践

### (1)「教職員向け学校図書館利用の手引き」

伊勢高等学校(以下、「伊勢高」)に赴任後、すぐにやったことは宇治山田商業高等学校(以下、「山商」)では恒例の教職員向け手引きの作成・配布・説明である。

山商のベースを、伊勢高のイメージで作成したフォーマットに流し込み、伊勢高の内容にアレンジする。伊勢高図書館でできることを全部、年度当初に教員向けに「見える化」する狙いがある。メニュー表のないレストランで料理を注文するのが怖いと同様に、「ブラックボックス」な学校図書館に大切な仕事を頼みたい教員はいない。

年度当初の職員会議で配布し、学校司書自らが説明した。

### (2)「探究のタネ」

山商をはじめ、専門高校では従来おこなわれてきた課題研究を、新しい指導要領ではすべての学校で(総合的な探究の時間)実施することになった。伊勢高はSSH(スーパーサイエンスハイスクール:文科省指定)二期目を迎える大規模進学校で、一期目では一部の選択者が先進的に課題研究に取り組んできたが、現在の二年生からは全員が課題研究に携わっている。探究するテーマは多岐にわたるが、探究するにあたって共通して使える情報を図書館通信の「探究のタネ—探究しやすくなる豆知識」というコーナーで連載することにした。

- 「その1」良いテーマ(論題/問い)を作るためには?」(ブラウジングの方法):5月号に掲載
- 「その2」先行研究(論文)の探し方」(CiNii Articles:国立情報学研究所のサーチエンジンの使い方):6月号に掲載

「その2」については二学年主任から各ホームルームに連絡してもらえることになり、その結果、課題研究の時間や休み時間に図書館で論文検索をする生徒の姿が見られるようになった。

また、SSH企画委員会や司書教諭に、課題研究と国語科の夏期課題に図書館活用(ガイダンス実施、展示コーナー作成)と、単独発行の「探究のタネ」(課題支援バージョン)を提案することにもつながった。

- 「探究のタネ—PBL※の情報検索がしやすくなる豆知識」(1年生SS探究Iグループ別課題解決型学習夏期課題)  
※「地域のPBL—Project Based Learning—」の略
- 「探究のタネ—1年生国語科夏期課題がしやすくなる豆知識」(1年生現代文夏期課題)

### むすびに

学校図書館を活用するポイントは、学校司書には当然のことでも、教員や生徒にとってはブラックボックスだという状況であり、その解消のために現場では常に試行錯誤している。それを学校司書が言語化し、さらに「見える化」することで、学校教育に学校図書館がもっとアクティブに関わっていけるのではないかと考えている。

さらに「見える化」したものが教員・生徒からどのように見られるかを、一人職種である学校司書はもっと意

識する必要があると思う。教員や生徒が本当に使えるものなのか、厳しくチェックを受けることも重要だ。その意味でも、教員との安定的な協働体制（分掌による図書館運営や、探究活動を支える組織への参画、司書教諭との日常的な連携など）を築くことが学校司書職の喫緊の課題である。